

# 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う介護福祉士養成課程の 学内における「介護実習」の学習効果

—学生のアンケート調査から—

藤 井 園美子・植 谷 澄 子・岩 永 十紀子・荒 谷 友里恵  
薦 田 美貴世・田 村 充・黒 木 ひとみ

はじめに

2019年11月22日に中華人民共和国湖北省武漢市で原因不明のウイルス性肺炎が初めて確認され、2020年2月11日WHOが新型コロナウイルスの感染による疾患を「COVID-19」と命名した。日本においても2月21日に新型コロナウイルス感染症の感染者が100人を超えた。

この後、3月7日には全世界で感染が確認された国・地域が100に達し、3月11日にWHOが世界各地での流行についてパンデミック相当と見解を出した。このことを受け、本学では3月の行事を中止または簡素化した。

2020年度は、4月から2か月間の自宅学習となり、このような状況下において前期の介護実習は、四国厚生支局の指導を受け本学の介護福祉士養成において初めて「介護実習」を学内における「介護実習」（以下、「介護実習（学内）」と略す。）に変更することとなった。

2007（平成19）年度に厚生労働省が示した資料（「介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」）によれば、介護実習Ⅰ（本学では「区分Ⅰ」と表現）のねらいは、「利用者の生活の場である多様な介護現場において、利用者の理解を中心とし、これに併せて利用者・家族との関りを通じた

コミュニケーションの実践、多職種協働の実践、介護技術の確認等を行うこと」に重点をおくこと（池田 2019）<sup>1)</sup>とある。

介護実習Ⅱ（本学では「区分Ⅱ」と表現）のねらいは、「一つの施設・事業所において一定期間以上継続して実習を行う中で、利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった一連の介護過程のすべてを継続的に実践すること」に重点をおくこと（久保田 2019）<sup>2)</sup>とある。

そこで、学外における「介護実習」（以下「介護実習（学外）」と略す。）と「介護実習（学内）」との相違点を抽出し、「介護実習（学内）」の利点を引き出し学習効果が上がるよう実習内容を設定した。

本研究では、今回の「介護実習（学内）」において、どのような学習効果があったかを明らかにすることを目的とする。

## I. 本学の介護実習について

令和元年文部科学省・厚生労働省令第四号社会福祉士介護福祉士学校指定規則に示されている教育内容における介護実習は450時間であり、本学での開講時期等は次頁表1のとおりである。

## II. 「介護実習（学内）」に変更した経緯

2020年4月7日、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言（一部の都府県）が発表され、4月16日には全都道府県の区域に拡大され期間は2020年5月31日までとなった。四国厚生支局にも問い合わせ、

令和2年11月30日受理  
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地  
香川短期大学 生活文化学科  
TEL 0877(49)8035 FAX 0877(49)5252  
Email fujii@kjc.ac.jp

表1 本学のカリキュラム（介護実習）について

授業科目	開講時期	教育内容（区分Ⅰ・Ⅱ）	実習施設等
介護実習Ⅰ	1年前期（5月下旬）3日間	区分Ⅰ	通所介護
	1年前期（6月下旬）3日間	区分Ⅰ	認知症対応型共同生活介護
	1年前期（夏季休業中）4日間	区分Ⅰ	小規模多機能型居宅介護
介護実習Ⅱ	1年後期（10月下旬～11月上旬）5日間	区分Ⅰ	特別養護老人ホーム 介護老人保健施設 障害者支援施設（身体）
	1年後期（12月中旬）5日間	区分Ⅰ	障害者支援施設等（精神・知的）
介護実習Ⅲ	1年後期（春季休業中）15日間	区分Ⅰ	特別養護老人ホーム 介護老人保健施設 障害者支援施設（身体） 救護施設
*介護実習Ⅳ	2年前期（6月中旬）3日間	区分Ⅰ （訪問介護実習）	社会福祉協議会 訪問介護事業所
	2年前期（夏季休業中）19日間	区分Ⅱ （施設実習）	特別養護老人ホーム 介護老人保健施設 障害者支援施設（身体） 救護施設

\*の部分为本研究の対象としている介護実習

「介護実習（学外）」実施に関する問題点を他学科・他専攻の実習対応も参考にし、4月13日に教務委員会に提出した（表2参照）。

その後、四国厚生支局から介護実習の扱いに関しては、文部科学省からの通達に準じることと回答があった。

香川県内における新型コロナウイルス感染症の感染者は、4月21日以降確認されておらず、6月から通常の対面授業が開始となった。

このような状況を踏まえ、今年度の介護実習をどのような方法で実施していくか、本学定例の生活介護福祉専攻会議（以下「専攻会議」と略す。）に加え臨時の専攻会議を開催し議論した。

また、令和2年6月1日付け文部科学省・厚生労働省からの事務連絡に「新型コロナウイルスの発生に伴う医療関係職種等の各学校・養成所および養成施設等の対応について」1. 学校養成所等の運営に係る取り扱い、（3）学校養成所等にある場合は、新型コロナウイルス感染症の影響により実習施設の受け入れの中止等により、実習施設の変更が必要となることが想定される。とあることも考慮し、実習先の施設・事業所（以下、「施設等」と略す）の受け

入れ状況と新型コロナウイルス感染症の拡大状況から介護実習の計画を検討した。

今年度の介護実習Ⅳの受け入れ状況（4月時点）は、不可または可能としながらも新型コロナウイルス感染症拡大の状況等により中止することもあると条件付きの実習先は、訪問介護の事業所等17件中6件、施設33件中7件で、全体の約1/4であった（表3参照）。

2年生の介護実習Ⅳは（区分Ⅰ）3日間と（区分Ⅱ）19日間であるが、（区分Ⅰ）は、利用者宅での実習となるため受け入れ先の確保が難しい状況のため中止し、8月実施の（区分Ⅱ）19日間に3日間を追加し、22日間を介護実習Ⅳとすることにした。

6月の専攻会議では、介護実習Ⅳは「介護実習（学外）」を実施することに決定していたが、7月14日の専攻会議において学生の行動履歴の把握や発生した場合の対応等を考慮し「介護実習（学外）」を中止の方向とした。香川県内において7月13日から毎日感染者が確認され、7月16日には感染者が複数確認されている状況を鑑み、7月16日の専攻会議において「介護実習（学内）」に変更することに決定した。

表2 令和2年度 介護実習（学外）実施に関する問題点（2020.4.13）

専攻・学年	生活文化学科 生活介護福祉専攻（2年生）	
実習名	介護実習Ⅳ	
実習時期	令和2年6月17日（水）～19日（金） 3日間 訪問 令和2年8月3日（月）～27日（金） 19日間 施設	
参加学生 （予定人数）	生活文化学科 生活介護福祉専攻 2年生（13名）	
実習までに 必要な行為 （対象：人数）	○健康診断（実習先に指定された学生：13人） ○結核検診（全学生：13人） ○事前オリエンテーション（全学生：13人）	
予想される問題 点及び対応案	予想される問題点	対応案
	実習受け入れが難しい（施設側）	実習間近に再度確認する
	訪問介護実習は、利用者宅での実習となるため受け入れ先の確保が難しいことと、訪問件数が多くなると多くの利用者と接触するため感染リスクが高まる	訪問介護実習は中止 施設実習の期間を長くする（同一場所での実習はリスクがまだ低い） 8月3日（月）～9月1日（火）22日間
	交通手段がJRや徒歩の学生が多く実習の配置が難しい	家族に送迎の依頼
	実習に出す基準をどうするのか	健康チェックシートの継続と施設側への開示、施設側の実習条件の確認
	実習中のマスク・消毒液の不足、購入できない	布マスクの作成
その他提案等	実習期間中に、施設で感染者が出た場合	実習を中止して、自宅待機 令和3年の2～3月で再度実習を行う 150時間の介護実習すべてのやり直しか、残りの実習時間でいいのか四国厚生支局に問い合わせる
	四国厚生支局に電話と書面（FAX）にて4/3及び4/6に質問事項を送っているが、確認して連絡するとのことであるが、現在（4/13午前）回答はまだない。	

表3 令和2年度 介護実習Ⅳ受け入れ状況（4月時点）  
件数

施設等種別	実習施設等	受け入れ不可	条件付き
社会福祉協議会 訪問介護事業所	11 6	3 1	2 0
特別養護老人ホーム 介護老人保健施設 障害者支援施設等	16 10 7	0 2 0	3 1 1

今回の研究対象となる「介護実習Ⅳ」は、介護実習Ⅳ（区分Ⅰ）3日間と介護実習Ⅳ（区分Ⅱ）19日間合わせて、「学内における介護実習Ⅳ」（以下「介護実習Ⅳ（学内）」と略す。）22日間とした。

### Ⅲ.「介護実習Ⅳ（学内）」の概要

#### 1. 目的・目標について

##### 1) 目的（可能な限り達成できるようにする）

(1) 個々の利用者と実際にかかわることで、生活リズムや個性を理解するという観点から利用者の生活の場である多様な介護現場での個別ケアを理解する。また、利用者・家族との関わりを通じてコミュニケーションを実践し、利用者ひとりひとりの生活の支援に必要な知識を学び、基本的な生活支援技術を実践する。

さらに、他職種の役割と他職種との連携について学び、チームの一員としての介護福祉士の役割について理解する。

- (2) その人らしい生活を支えるために個々の生活リズムや個性を理解し、介護過程の実践的展開を通してその意義を学ぶ。

生活の場面において必要とされる生活支援技術の実践力を習得する。

施設運営のプログラムに参加し、サービス全般について理解を深めるとともに、介護の継続性やチームワークについて学ぶ。さらに、介護福祉士としての職業倫理に基づいた援助や態度を養う。

今回の介護実習Ⅳは「介護実習Ⅳ（学内）」となったため、目的については「可能な限り達成できるようにする」という文言を追加した。

## 2) 目標

### (1) 社会福祉協議会、訪問介護事業所

- ①居宅における介護の特性を学ぶと同時に、自立生活を援助する方法や個別の介護計画の展開について学ぶ。
- ②地域社会と訪問介護等事業所との関係について説明を受け、家族も含めた地域社会への働きかけの必要性を学ぶ。
- ③居宅における日常生活援助に関する生活支援技術の能力を深めると同時に住環境に関する理解を深め、住環境の調整や福祉用具の活用について学ぶ。
- ④サービス担当者会議の説明を受け、保健・医療・福祉の連携について知り、チームワークの必要性について学ぶ。
- ⑤社会福祉協議会や訪問介護事業所における独自の取り組みやサービス内容について学ぶ。

### (2) 特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、障害者支援施設

- ①指導者からの情報提供をもとに、利用者の全体像（利用者の健康状態、生活機能、背景因子の側面）を把握し、情報の解釈・関連づけ・統合化を行い、介護計画を立案する。
- ②利用者の様々な状況に応じたアクティビティを計画立案、実施、評価する。
- ③介護職間ならびに関係職種間との連携、チームワーク、リーダーシップについて学ぶ。

### (1)(2) 共通の目標

- ①利用者のさまざまな状況に応じた介護計画の立案、生活支援技術、各種別のサービスの特徴や多

職種連携等を通して、援助者としての自己覚知・自己洞察を深め、介護福祉士としての倫理観を培う。

## 2. 実習内容

上記の実習目標を達成するために、週ごとに詳細な学習課題及び行動目標を示し、学生にとって取り組みやすい「介護実習Ⅳ（学内）」の実習内容を作成した。

- a. 本来介護実習を行う予定であった三種別の施設の指導者を講師として招き、講師より事例提供を受け介護過程の展開（介護計画の立案）を行う。また、各専門職から、訪問介護、人生の最終段階における介護（看取り）、地域密着型サービス、多職種連携について講義を受ける。
- b. 地域密着型サービスを利用しながら住み慣れた地域（自宅）で生活をしている家族から情報提供を受け、介護サービスのあり方やサービスの組み合わせについて考える。
- c. アクティビティについて、利用者の状況にあった計画を立案、実施（発表）し、学生相互および教員が評価を行う。
- d. DVD「ケアニン - あなたに会えてよかった -」を視聴し、その後のグループワークを通して、介護観を深める。
- e. ベッド上での臥床や片麻痺の擬似体験、1日（8時間）おむつ着用体験から、利用者理解を深める。
- f. 自宅における生活援助として、掃除、買い物、調理の課題を通して訪問介護の必要性について考える。
- g. 学生が模擬便を作成して排泄介助を行う、また、一般浴槽への入浴介助等の実践から生活支援技術の能力を高める。

上記の実習内容の日程を図1にまとめた。

## 3. 実習期間及び実習時間

2020年8月3日（月）～9月1日（火）22日間

1 週 目：8月3日（月）～8月8日（土）

2 週 目：8月11日（火）～8月20日（木）

3 週 目：8月21日（金）～8月27日（木）

4 週 目：8月28日（金）～9月1日（火）

種別	目標	実習内容			
		1週目	2週目	3週目	4週目
訪問介護福祉協議会	(目標①)	※訪問介護		※ケアニン	在宅事例
	----- 個別の介護計画の展開	※社協			
	(目標②)	訪問介護		ケアニン	在宅事例
	----- 地域社会への働きかけ	社協			
	(目標③)	訪問介護	自宅学習(調理)	ケアニン	在宅事例
	----- 住環境の調整や福祉用具の活用	生活支援技術	自宅学習(住環境)		
	(目標④)	訪問介護		ケアニン	在宅事例
	----- チームワークの必要性	社協			
特別養護老人ホーム 障害者支援施設	(目標①)	※特養 事例 講義 アセスメント 計画立案 発表	※障害 事例 講義 アセスメント 計画立案 発表	※老健 事例 講義 アセスメント 計画立案 発表	
	----- 利用者の全体像の把握 及び介護計画立案				
	(目標②)		アクテビティ 講義・計画・準備	アクテビティ 発表	
	----- アクティビティ				
	(目標③)		アクテビティ	アクテビティ	管理栄養士 マネジメント リーダーシップ 多職種連携
全種別	----- 連携、チームワーク、リーダーシップ			理学療法士 看取り	
	共通の目標	訪問介護 社協	自宅学習(調理) 自宅学習(住環境)	ケアニン 理学療法士	在宅事例 管理栄養士の
	----- 自己覚知・自己洞察 介護福祉士としての倫理観	生活支援技術 特養 事例 介護保険制度 利用者擬似体験	障害 事例 アクテビティ ※障害者総合支援法	看取り 老健 事例 アクテビティ	マネジメント リーダーシップ 学内実習まとめ

※注釈 図中の言葉を次のように略称で表記

略称	正式名称
社協	社会福祉協議会
訪問介護	訪問介護事業所
特養	特別養護老人ホーム
障害	障害者支援施設
老健	介護老人保健施設
ケアニン	ケアニン～あなたに会えてよかった～
障害者総合支援法	障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律

図1 介護目標に対する実習内容



実習時間：9：10～18：00

休憩時間：12：20～13：10（50分間）

#### IV. 研究方法

##### 1. 調査方法

（1）調査対象：本学 生活文化学科 生活介護福祉専攻 2 年生（13名）

（2）調査期間：2020年10月

（3）調査内容及び項目：無記名自記式を活用し、集合調査とした。

質問項目 1：介護実習Ⅳ（学内）の満足度とその理由について

質問項目 2：介護実習Ⅳ（学内）の実習項目ごとの満足度について

質問項目 3：介護実習Ⅳ（学内）で学べた内容について

質問項目 4：学外における介護実習Ⅲ（以下、「介護実習Ⅲ（学外）」と略す）と比較して「介護実習Ⅳ（学内）」で学べたことについて

質問項目 5：介護実習Ⅳ（学内）で学べて良かった点について

質問項目 6：介護実習Ⅳ（学内）の実習の前後で変わったことについて

##### 2. 分析方法

本学 2 年生13名に無記名式アンケートを実施し、回収率：100%，有効回答数：13件のデータを用いた。データの解析にはExcelを用いて、単純集計した。質問項目 6 の自由記述は、記述内容をKJ法を参考に整理し、カテゴリー集計した。

##### 3. 倫理的配慮

本学 2 年生に研究目的を明示し、調査の趣旨について協力者の理解を十分得ること、個人が特定されないようにすること、データの厳重な保管、調査により得られた結果は研究目的以外には使用しないこと、回答の協力は任意であることを説明し、質問紙にチェック欄を設け同意を得た。

#### V. 結果

アンケート結果については、以下のとおりであった。

##### 1. 基本情報

調査対象は、男性 3 名、女性10名の合計13名である（図 2）。

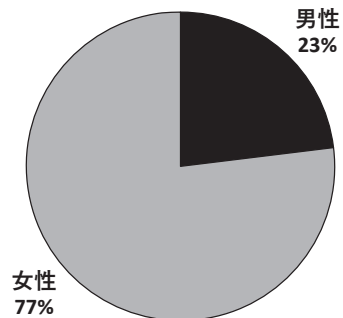


図 2 性別

年代は、20歳未満 6 名、20歳代 4 名、30歳代 1 名、50歳代 2 名である（図 3）。

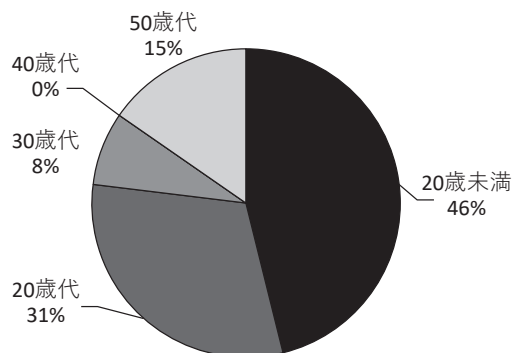


図 3 年齢

##### 2. 質問項目 1：介護実習Ⅳ（学内）の満足度とその理由について

「満足度」については、「非常に満足」7 名（53.8%）、「満足」6 名（46.2%）、「どちらかと言えば満足」「どちらかといえば不満足」「不満足」はいずれも 0 % で、全員が満足しているという結果であった（図 4）。その理由は、「学内実習でしか学べ

ない学びがあった」5名(38.5%)で一番多かった。その一方で、「学外の施設でしかできないこともある」と述べた者も1名(7.7%)いた。

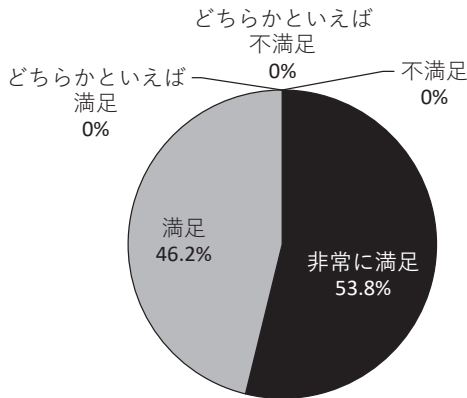


図4 介護実習Ⅳ（学内）満足度

### 3. 質問項目2：介護実習Ⅳ（学内）の実習項目ごとの満足度について

学べた内容の20項目について、「満足している」が多かった項目は「③訪問介護事業所の概要等」「⑮看取りについて、看護職との連携」12名(92.3%)、

次いで「④訪問介護とコミュニティ」11名(84.6%)、次に「⑯ケアニン（DVD）視聴とグループワーク」「⑱多職種連携」10名(76.9%)であった。

「満足している」と「やや満足している」のいずれかを選んだ者の、20項目の平均は92.7%、各項目においては80%以上であった。「⑫アクティビティ実施」は、「満足していない」「あまり満足していない」各1名(7.7%)であった(図5)。

### 4. 質問項目3：介護実習Ⅳ（学内）で学べた内容について

学べた内容18項目のうち、16項目を選んだ者が3名(23.1%)、13項目を選んだ者が3名(23.1%)であった。「利用者の擬似体験を通して利用者へのかかわり方」は全員が選んだ。「多職種連携の方法と必要性」「看取りへの取り組み（心構えや支援の方法）」12名(92.3%)、「施設での介護と訪問介護における利用者のニーズや支援内容の違い」「アクティビティ計画（準備）の重要性」を11名(84.6%)が選んだ。一方で、「介護福祉士としての倫理観」を選んだ者は4名(30.8%)であった。「その他」1名(7.7%)が「介護についての価値観」と記述があっ

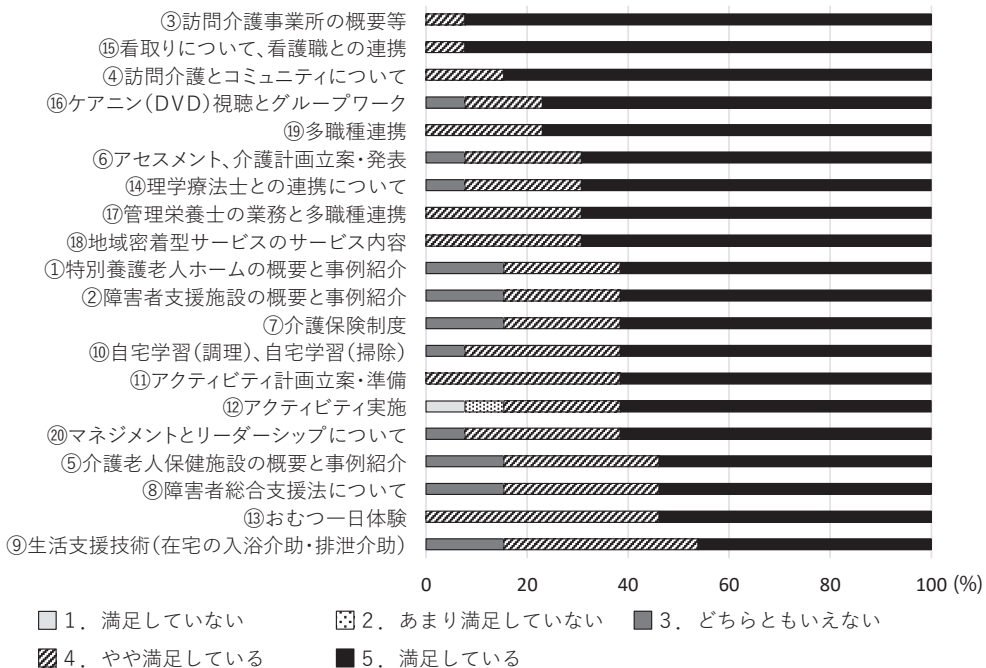


図5 介護実習Ⅳ（学内）の実習項目ごとの満足度

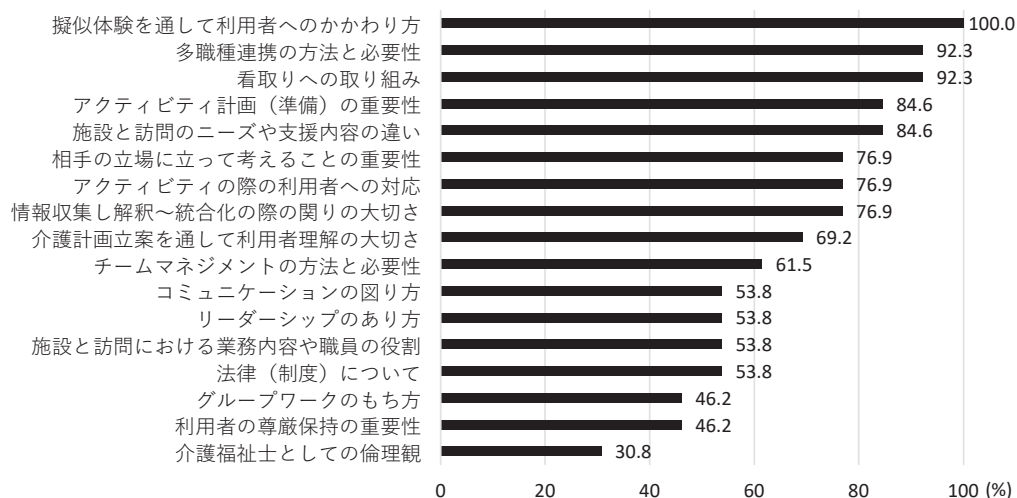


図6 介護実習Ⅳ（学内）で学べた内容

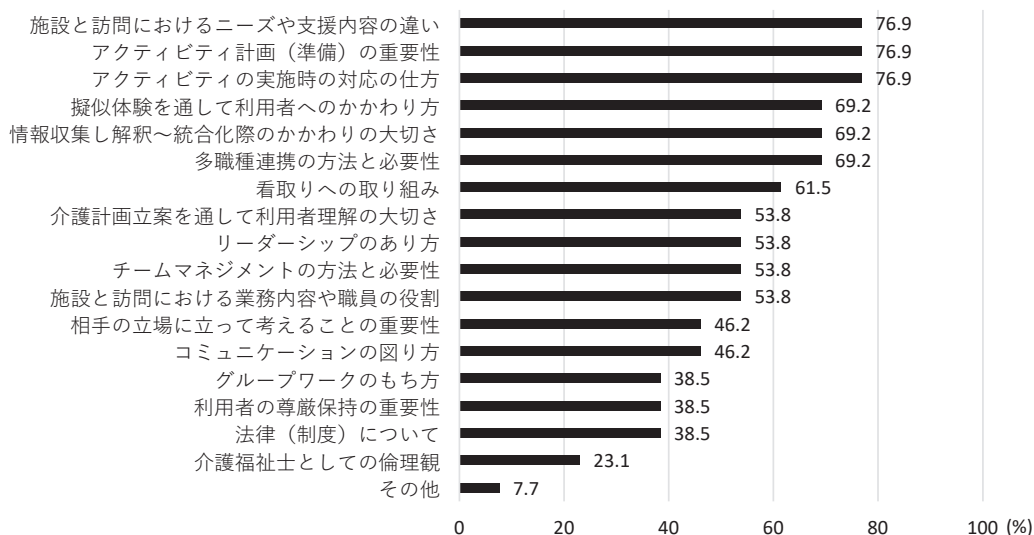


図7 介護実習Ⅲ（学外）と比較して介護実習Ⅳ（学内）で学べたこと

た（図6）。

1人の学生が学べた内容として選択した項目は、5～16項目とばらつきがあるが、平均すると11.5項目であった。

#### 5. 質問項目4：介護実習Ⅲ（学外）と比較して介護実習Ⅳ（学内）で学べたことについて

介護実習Ⅲと比較して介護実習Ⅳ（学外）で学べた内容18項目で、最も多く選択したのは「施設での介護と訪問介護における利用者のニーズや支援内容

の違い」「アクティビティ計画（準備）の重要性」「アクティビティの実施を通して利用者への対応の仕方」の3項目10名（76.9%）であった。「介護福祉士の倫理観」を選んだのは3名（23.1%）であった。

「その他」1名（7.7%）は、「幾種類もの施設の話聞き、介護計画をいくつも立案したこと、質問できたこと」と記述があった（図7）。

1人の学生が学べた内容として選択した項目は、5～15項目とばらつきがあるが、平均すると9.4項目であった。



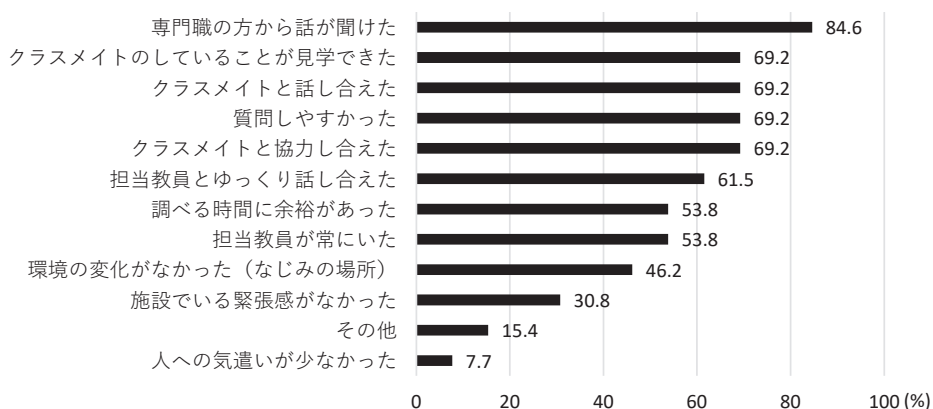


図8 介護実習Ⅳ（学内）で学べて良かった点

表4 介護実習Ⅳ（学内）の前後における変化

カテゴリー	サブカテゴリー	記述件数
人間的成長	プラス思考への転換, 自己覚知, 計画性, 不安の解消	10
学びの深化	施設の特性, 記録, 介護過程, 認知症の理解, 利用者との関わり方, チームアプローチ	7
クラスメイトの存在	協力, 相互作用	6
表現力向上	自分の考えを述べることができる, コミュニケーションが取れる	4
介護観の変化	介護についての価値観	2

#### 6. 質問項目3と質問項目4について

質問項目3と質問項目4において学べたことの内容18項目を比較し、質問項目4の方が多かった項目は「施設及び訪問介護事業所における業務内容や職員の役割」1項目1名の増加、逆に少なかった項目は14項目であり、その中でも「利用者の擬似体験を通して利用者へのかかわり方」「相手の立場に立って考えることの重要性」4名、「多職種連携の方法と必要性」3名の減少であった。

1人の学生が学べた内容を比較すると、質問項目4の方が多かった者は1名1項目の増加であった。逆に9名は1～5項目の減少であった。

#### 7. 質問項目5：介護実習Ⅳ（学内）で学べて良かった点について

12項目のうち、最も多く選択したのは、「専門職の方から話が聞けた」11名（84.6%）であった。次いで、「クラスメイトのしていることが見学できた」「クラスメイトと話し合えた」「質問しやすかった」

「クラスメイトと協力し合えた」の9名（69.2%）であった（図8）。

#### 8. 質問項目6：介護実習Ⅳ（学内）の実習の前後で変わったことについて

具体的に書いた自由記述の内容を、KJ法を参考にフレーズごとに分類し、5つにカテゴリー化した。表記は《 》でくくられたものをカテゴリー、[ ]でくくられたものをサブカテゴリーとした。すべての記述内容は肯定的なものであった。

最も多かったカテゴリーは、《人間的成長》に関する内容で、[プラス思考への転換]、[自己覚知]、[計画性]、[不安の解消]の4つのサブカテゴリーで10件の記述があった。

次に多かったのは、《学びの深化》に関する記述で、[施設の特性]、[記録]、[介護過程]、[認知症の理解]、[利用者理解と関わり方]、[チームアプローチ]の6つで7件の記述があった。

次いで多かったのは《クラスメイトの存在》に関

する記述で、[協力]、[相互作用]の2つで6件の記述があった。

《表現力向上》に関する記述は、[自分の考えを述べることができる]、[コミュニケーションが取れる]の2つで4件の記述があった。また、《介護観の変化》に関する記述は、[介護についての価値観]の1つで2件の記述があった(表4)。

## VI. 考察

学生のアンケート調査において、いずれの質問項目からも、学生の満足度は非常に高く、すべての学生が多くの「学び」があったと感じていることがわかる。「学外の施設でしかできないこと」があることを認識している一方で、「学内でしかできない」内容に対して一定の価値を認めているといえる。

質問項目2「満足度」の上位3項目、質問項目3「学べた内容」の上位3項目、質問項目5「学内実習で良かった点」の上位5項目について、「学生が大きく影響を受けた6つの要素」として以下のように考えた。

### 1. 擬似体験(利用者理解)

擬似体験を行うことで、高齢者や障害者の身体に起こっている感覚が体感でき、利用者が感じている困惑や苦痛が理解できる。

今回の「介護実習Ⅳ(学内)」において、ベッド・車椅子上での拘束、おむつ着用体験を実施した。アンケート調査において、「おむつ体験などを行ったことによって利用者さんが感じていることなどを利用者さんの視点で知ることができ、介護を行う時の声の掛け方などを普段以上に考えるようになった。」と回答している学生がいた。鍋澤は、利用者の介護のニーズを満たすためには、その体験の認知と理解が必要だと述べた上で、理論的学習と視聴覚教材のみの学習では実感を伴わないためそれらを満たすには不十分であり、実際に体験させることで、「利用者の立場に寄り添う」ことができた(2005 鍋澤)<sup>3)</sup>と述べている。今回の「介護実習Ⅳ(学内)」においても実際に1日8時間のおむつ着用体験をすることで、利用者の苦痛や不快感、羞恥心などを体感し利用者の気持ちを理解することができたと考えられる。

さらに、太田らは模擬便を使用した陰部洗浄・おむつ交換体験は、学生が臨場感を実感しながら学ぶことができ、実践に生かすことができる教育方法であると考えられる。(2011 太田ら)<sup>4)</sup>と述べている。これらのことから利用者の立場を擬似体験することで、自身がどのように行動すべきかを考えることができ、利用者に寄り添った援助の必要性を学ぶことができたと考えられる。

### 2. 看取り(介護観の変化)

厚生労働省は2018年3月に「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」の改定を行った。本ガイドラインについて、人生の最終段階における医療・ケアに従事する医療・介護従事者が、人生の最終段階を迎える本人及び家族等を支えるために活用するものであるという位置づけもなされており、看取りの教育が重要視されている。利用者の「死」に向き合い、その「死」に寄り添い、最期までその人らしい生活を支えることが介護福祉士には求められている。

そこで、特別養護老人ホームの看護師及び介護福祉士による看取りについての講義を行った。「施設では中々学べないことが学べてよかった」と学生が述べている。このことは今までの「介護実習」において実習期間中に看取りの場面に直面することがほとんどないことに加え、近年核家族化が進み若い学生に「死」の概念が十分に備わっていないことが考えられる。

今回の講義において「死」に対する援助者の向き合い方、本人はもちろん家族に対するケアの重要性を理解したと考えられる。内田は、介護福祉士養成における死の教育では、まず「第1に自分の問題として「死」を考えさせ、自己の死生観を育てることが重要である」と述べている。また『「死」を身近な問題として考え、生と死の意義を探求し、自覚をもって自己と他者の死に備えての心構えを修得することを目指す必要がある』(内田 2008)<sup>5)</sup>とも述べている。「死」を身近なものとして捉え、現実として受け止め、死への心構えを修得し、学生自身の死生観を養う一助となったと考える。

### 3. 専門職の講義（計画立案）（専門性の理解）

角田は、介護実習等で利用者と関わることは「よそごとではない身近な問題として具体的にイメージしながら考えることが可能になる」、「現場の学びは、授業での学び以上に学生の印象に残りやすい。」（角田 2018）<sup>6)</sup>と述べている。

今回の「介護実習Ⅳ（学内）」では、利用者とのかわりかできないため、事例を紹介していただき、実在の利用者の計画立案をすることで学びが深まり、講義に頼ることをねらい、講師依頼を行った。結果として、11人の学生が「講師の話が聞けて良かった」と答え、12人が学べた内容として「多職種連携の方法と必要性」をあげている。

専門職の講義では、利用者と常に向き合いかわっている専門職の発する言葉ひとつひとつには臨場感があり、学生は学内にいながら福祉現場や利用者について具体的なイメージをもって計画を立案できたと考えられる。学生が講師の話から学んだこととして「コミュニケーションの重要性」「信頼関係の構築」「洞察力」「気づき」「多職種連携の大切さ」と答えていることから、利用者のニーズを的確に把握し利用者の立場に立って物事を考える専門職の姿勢は、学生に多面的な学びをもたらしたと考えられる。また、専門職の講義は、知識、技術の伝達のみならず、専門職としての使命感、倫理観、さらにそこには利用者主体の援助に懸ける思いが存在していた。これらは机上では達成できない学びであり、介護福祉士に求められる資質の形成につながる可能性があると考えられる。

### 4. チームアプローチ（協同・相互作用）

平成19年度介護福祉士養成課程のカリキュラム改正において、資格取得時の到達目標11項目の1つに利用者本位のサービスを提供するため、「多職種協働によるチームアプローチの必要性を理解できる」ことが掲げられている。また、コミュニケーション技術の科目では、介護におけるチームのコミュニケーションも含まれることとなった。さらに、令和3年度から、「人間関係とコミュニケーション」の科目が30時間から60時間へと変更することとなっており、チームマネジメントの内容が強化される。<sup>7)</sup>介護の対象者は、居住地、生活背景等、ますます多

様化、複雑化し、介護福祉士としてチームアプローチができるチームマネジメント力はすでに必要性が高まっている。「介護実習Ⅳ（学内）」において、学生はどの外部講師も「チームアプローチ」について話していることに気づいており、多職種連携やチームとして介護福祉士がアプローチしていくことの重要性について学ぶことができた。

### 5. クラスメイトの存在

#### （自信・安心 積極性）（学びの統合）

介護実習は、同施設等に学生1名で臨むことが多く、専門職から指導を受ける際、質問したくても積極的にできないという学生が多くみられる。しかし、今回の「介護実習（学内）」では、クラスメイトと同じ講義を受け、他の学生の質問を聞いて積極的に質問できた。また、クラスメイトに「分からないことをその都度聞くことができた」ため、一人では解決できなかったこともクラスメイトとの意見交換から「学べたことが多くあった」、「手を差し伸べてくれる人がいて学内実習でよかった」とクラスメイトと協同することによりお互いに作用しあったと思われる。多川らは「自らの向上心で学びを深めていくためには、まずは体験、その後の学び合いと振り返りのプロセスが非常に重要である。」（多川ら 2017）<sup>8)</sup>と述べている。クラスメイトの存在は相互の自主的な学び合いの機会を生んだと考えられる。「実技の演習でも、もしできなかったらどうしよう」という「不安」な気持ちはクラスメイトが「教えてくれた」ことから「落ち着いて実施」できたことにより自信や安心につながったと考える。

アクティビティの計画（準備）の重要性について、11名の学生が「学べた」と答えている。「介護実習Ⅲ（学外）」で行ったアクティビティでは、学生一人で計画し、利用者の反応、指導者からの指導助言により学んできた。今回の「介護実習Ⅳ（学内）」では設定された利用者の状況を踏まえ、学生一人で計画したが、クラスメイト全員の発表を見学できたことによりクラスメイトの「ここまねしたい」や「参考にしたい」ものが多くあったと述べており学生相互の学びが深まったと考えられる。

## 6. 発表・意見交換（表現力向上）（学びの統合）

課題解決のために個人作業に加えグループワークを行った。グループワークにおいて、大熊は、「自分の意見を言うこと、人の意見を聞き・受け入れることはそれぞれ大事でありそのうえで、メンバーの積極的な協力が大事」（大熊 2017）<sup>9)</sup>と述べている。このことは、「いろいろな自分の思いを述べる事ができた」と答えていることからクラスメイト間の意見を聞き受け入れることと、自分の意見を述べることの重要性を理解できたといえる。

外部講師の講義後30分程度の意見交換の時間を設けた。また、教員1名に対して2名程度の学生を担当し、個別指導を行い学生からの質問に応じた。今回の「介護実習Ⅳ（学内）」では、教員と学生が常に話し合える環境であったことと実習内容が把握できていたため、事前に質問を考えるよう指導も行っていったことから、初日から自発的に質問できた。学生から「積極的に質問できる場を設けてくれてよかった」や「身近にクラスメイトや先生にすぐに聞けた」と答えている。質問したり教えあったりすることで自身では気づけないことに気づくことができ、他者に質問することや他者の質問を聞くことが学びを深め学生の満足度につながったと考える。道田は、質問することが『より深く考え、適切に理解するきっかけとなる』と示し、「学生が質問をしない理由の一つとして、質問に触れる経験が少ないことが考えられる。」（道田 2011）<sup>10)</sup>と述べている。ここでの質問に触れる経験とは、学生が自発的に質問し他者の意見を聞き自らが問題を解決でき満足できることを指す。これらの『質問経験』が、『質問する力』となり『思考力』につながると示唆している。このことは、本研究においても同様の効果がみられ、質問を多くする学生は、『質問する力』がつき、その内容が高次に変化したことは『思考力』につながった。また、質問が少なかった学生にとっては、『質問経験』が得られたといえる。

以上の「学生が大きく影響を受けた6つの要素」を踏まえ、介護実習Ⅳ（学内）の前後で様々な学びを通して得られたものについて、以下のように考えられる。擬似体験を通じ利用者の立場に立って物事を考えることで、利用者理解が深まり、自身の介護

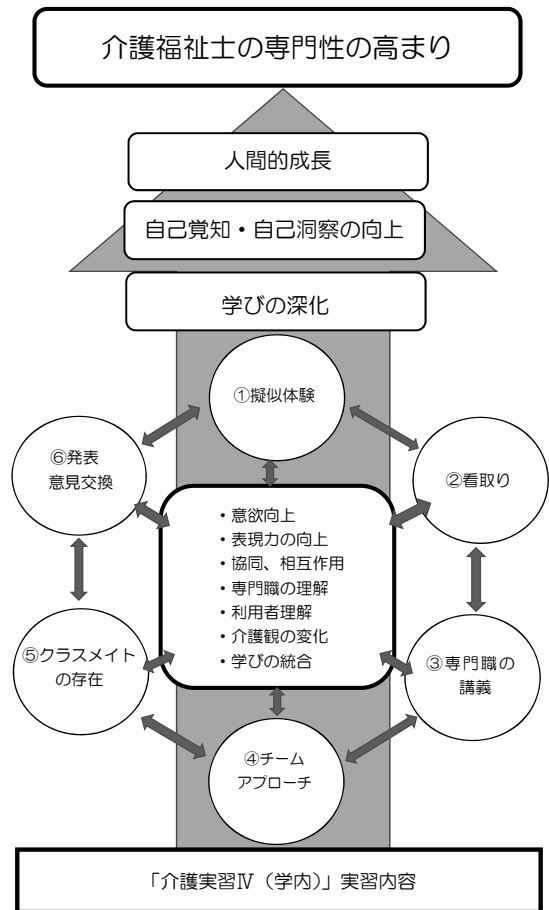


図9 「介護実習Ⅳ（学内）」の学習効果

観の変化が起こったと考えられる。また同様に看取りについて学ぶことで援助者としてどう死に向き合うか、介護観のさらなる構築につながったと考えられる。クラスメイトとの協力やチームアプローチの重要性を学ぶことで、協同することの大切さ、難しさ、援助者としての役割や立場を学ぶことができたと考えられる。また、専門職（外部講師）から具体的な話を聞き、より深く学びたいという気持ちが生じ、積極的に学ぶ姿勢が見られた。その姿勢は発表や意見交換時の質問の頻度や内容にも現れ、それらは単に知識の集積にとどまらず、自身の表現力向上につながったと考える。さらにクラスメイトと同じ空間で学ぶことにより、お互いを意識し、相乗作用が働き、より質の高い学びを得ることができたと考えられる。



これらは、学生自身の自己覚知・自己洞察につながり、ひいては人間的成長につながったのではないかと推測する。

## VII. 結論

今回の「介護実習Ⅳ（学内）」は、学生ひとりひとりが多くの学びを得ることができ、実習内容をクラスメイトと一緒に熟していき成果を上げ、実習目標を十分に達成するものとなった。

このような学びを得ることができたのは、1年次からの学内での教育内容を通して、知識や技術の集積を図ったことや、1年次に計5回の「介護実習（学外）」があったこと、1年次最後の15日間の「介護実習Ⅲ（学外）」を通してこれまでの知識の統合を図ったことが考えられる。さらに2年次は1年次の「介護実習（学外）」での学びを元に、学内での教育内容が今回の「介護実習Ⅳ（学内）」の学びに繋がったと考える。

「介護実習Ⅳ（学内）」において、多くの学びを得られたが「介護実習（学外）」における利用者と直接関わる実体験で得られる学びが、「介護実習（学内）」では体験することができない。このことが「介護実習（学内）」の限界であり、介護福祉士養成に重要な対人援助を学ぶには「介護実習（学外）」は必要不可欠だといえる。しかし、今後も「介護実習（学内）」に変更せざるを得ない状況になれば、以上のことを踏まえ介護福祉士の専門性を育成できる実習内容を構築する必要がある。

## VIII. まとめ

今回の「介護実習Ⅳ（学内）」で学べて良かった項目の中で高い評価を受けた介護実習の内容を今後の学内での教育内容に取り入れることが求められている。また、介護福祉士養成課程の教育内容の見直しにおける「介護実習」科目に示された「教育内容に含むべき項目」及び「留意点」を「介護実習（学外）」に反映させ、学生ひとりひとりに対してきめ細やかな指導を実習施設の指導者と協力しながら行う必要がある。

## 謝 辞

本研究にあたり、「介護実習Ⅳ（学内）」でご講義をしていただいた介護事業所の職員の方々、及び調査にご協力いただきました学生の皆様に心から感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 介護福祉士養成講座編集委員会（池田明子）、2019、最新介護福祉士養成講座総合演習・介護実習、中央法規出版、206
- 2) 介護福祉士養成講座編集委員会（久保田トミ子）、2019、最新介護福祉士養成講座総合演習・介護実習、中央法規出版、232
- 3) 鍋澤信子、2005、「おむつ内排泄」体験学習の介護教育上の有効性：体験レポートからの分析と考察、國學院短期大学紀要、22、163-171
- 4) 太田淳子、山本君子、2011、模擬便使用による高齢者のおむつ交換体験からの学生の学び―校内実習終了後のアンケート調査を通して―、東京医科大学看護専門学校紀要、21（1）、19-29
- 5) 内田富美江、2008、介護福祉養成教育における死と看取り教育の必要性、川崎医療短期大学紀要、28、53-58
- 6) 角田ますみ、2018、介護福祉士養成課程（4年課程）における介護倫理教育―介護科目で講義される倫理的内容の分析を通して―生命倫理、28（1）、75-86
- 7) 厚生労働省、社会福祉士介護福祉士学校指定規則の一部を改正する省令（平成30年文部科学省・厚生労働省令第3号）及び社会福祉士介護福祉士養成施設指定規則の一部を改正する省令（平成30年厚生労働省令第104号）
- 8) 多川則子、関谷みのぶ、2017、「自ら学ぶ」ための短大2年間の連続した保育者養成―協同学習の視点からの考察―、教育保育研究紀要3
- 9) 大熊美佳子、2017、グループワークにおける保育学生の協同作業認識と役割意識について、秋草学園短期大学紀要、34、55
- 10) 道田泰司、2011、授業においてさまざまな質問体験をすることが質問態度と質問力に及ぼす効果



#### 参考文献

- 浅野いずみ, 2018, 介護福祉士課程における学内授業科目と学外実習の関係性についての研究, 目白大学高等教育研究, 24
- 公益社団法人 日本介護福祉士会, 2019, 平成30年度 生活困窮者就労準備支援事業費等補助金 社会福祉推進事業 介護福祉士の養成カリキュラム改正を見据えた 介護実習科目の実習指導体制のあり方に関する調査研究事業 報告書
- 横山さつき, 2008, 介護実習における学生の不安に関する因子分析的研究, 中部学院・中部学院短期大学部研究紀要 9, 125-133
- 藤井園美子他, 2020, 介護総合演習における合同授業が介護実習に及ぼす影響について, 香川短期大学紀要, 48, 83-96
- 藤井園美子他, 2018, 介護実習の指導に関する研究—介護実習における実習指導の実態と連携への検討—, 香川短期大学紀要 46, 115-126

資料 1

介護実習Ⅳ（学内）における学生の学びの効果についてのアンケート

No.1

アンケート調査ご協力をお願い

この度、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、介護実習Ⅳについて学外実習を学内実習に変更しました。そこで、介護実習Ⅳ（学内）においてどのような学びの効果が得られたかを把握するためにアンケート調査を行いますので、ご協力をお願いいたします。調査内容は、教育研究のみに使用します。個人が特定されないようデータで管理し、成績等には一切影響しないことを約束します。

以上の内容を承諾し、アンケート調査にご協力いただける方は、チェックをお願い致します。

☐

1. 介護実習Ⅳ（学内）の満足度についてあてはまるものに○を1つつけてください。また、その理由も答えてください。

1. 不満足 ( )    2. どちらかといえば不満足 ( )    3. どちらかといえば満足 ( )  
4. 満足 ( )    5. 非常に満足 ( )

その理由

2. 介護実習Ⅳ（学内）(①～⑳) についての満足度 1～5 で一番あてはまる番号を答えてください。

1. 満足していない    2. あまり満足していない    3. どちらともいえない  
4. やや満足している    5. 満足している

① 特別養護老人ホームの概要と事例紹介	1	2	3	4	5
② 障害者支援施設の概要と事例紹介	1	2	3	4	5
③ 訪問介護事業所の概要等	1	2	3	4	5
④ 訪問介護とコミュニティについて	1	2	3	4	5
⑤ 介護老人保健施設の概要と事例紹介	1	2	3	4	5
⑥ アセスメント、介護計画立案・発表	1	2	3	4	5
⑦ 介護保険制度	1	2	3	4	5
⑧ 障害者総合支援法について	1	2	3	4	5
⑨ 生活支援技術（在宅における入浴介助・排泄介助）	1	2	3	4	5
⑩ 自宅学習(調理)、自宅学習(掃除)	1	2	3	4	5
⑪ アクティビティ計画立案・準備	1	2	3	4	5
⑫ アクティビティ実施	1	2	3	4	5
⑬ おむつ一日体験	1	2	3	4	5
⑭ 理学療法士との連携について	1	2	3	4	5
⑮ 看取りについて、看護職との連携	1	2	3	4	5
⑯ ケアニン（DVD）視聴とグループワーク	1	2	3	4	5
⑰ 管理栄養士の業務と多職種連携	1	2	3	4	5
⑱ 地域密着型サービスのサービス内容	1	2	3	4	5
⑲ 多職種連携	1	2	3	4	5
⑳ マネジメントとリーダーシップについて	1	2	3	4	5

## 3. 介護実習Ⅳ(学内)で学べた内容は何ですか(複数回答可)

- ( ) 法律(制度)について
- ( ) 施設での介護と訪問介護における利用者のニーズや支援内容の違い
- ( ) 施設及び訪問介護事業所における業務内容や職員の役割
- ( ) 多職種連携の方法と必要性
- ( ) チームマネジメントの方法と必要性
- ( ) リーダーシップのあり方
- ( ) 情報収集し解釈・関連づけ・統合化する際のかかわりの大切さ
- ( ) 介護計画立案を通して利用者理解の大切さ(確認することの必要性)
- ( ) 利用者の擬似体験を通して利用者へのかかわり方
- ( ) アクティビティ計画(準備)の重要性
- ( ) アクティビティの実施を通して利用者への対応の仕方
- ( ) 看取りへの取り組み(心構えや支援の方法)
- ( ) 利用者の尊厳保持の重要性
- ( ) 介護福祉士としての倫理観
- ( ) コミュニケーションの図り方
- ( ) グループワークのもち方
- ( ) 相手の立場に立って考えることの重要性
- ( ) その他 ( )

## 4. 介護実習Ⅲ(2月に実施)と比較して介護実習Ⅳ(学内)で学べたことは何ですか。(複数回答可)

- ( ) 法律(制度)について
- ( ) 施設での介護と訪問介護における利用者のニーズや支援内容の違い
- ( ) 施設及び訪問介護事業所における業務内容や職員の役割
- ( ) 多職種連携の方法と必要性
- ( ) チームマネジメントの方法と必要性
- ( ) リーダーシップのあり方
- ( ) 情報収集し解釈・関連づけ・統合化する際のかかわりの大切さ
- ( ) 介護計画立案を通して利用者理解の大切さ(確認することの必要性)
- ( ) 利用者の擬似体験を通して利用者へのかかわり方
- ( ) アクティビティ計画(準備)の重要性
- ( ) アクティビティの実施を通して利用者への対応の仕方
- ( ) 看取りへの取り組み(心構えや支援の方法)
- ( ) 利用者の尊厳保持の重要性
- ( ) 介護福祉士としての倫理観
- ( ) コミュニケーションの図り方
- ( ) グループワークのもち方
- ( ) 相手の立場に立って考えることの重要性
- ( ) その他 ( )

## 5. 介護実習Ⅳ(学内)で学べてよかった点は何ですか。(複数回答可)

- |  |  |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> 担当教員とゆっくり話し合えた              | <input type="checkbox"/> クラスメイトのしていることが見学できた |
| <input type="checkbox"/> クラスメイトと話し合えた                | <input type="checkbox"/> 担当教員が常にいた           |
| <input type="checkbox"/> 調べる時間に余裕があった                | <input type="checkbox"/> 専門職の方から話が聞けた        |
| <input type="checkbox"/> 質問しやすかった                    | <input type="checkbox"/> クラスメイトと協力し合えた       |
| <input type="checkbox"/> 環境の変化がなかった(なじみの場所)          | <input type="checkbox"/> 施設でいる緊張感がなかった       |
| <input type="checkbox"/> 人への気遣いが少なかった(実習生としての立ち振る舞い) |  |
| <input type="checkbox"/> その他(                        | )  |

## 6. 介護実習Ⅳ(学内)の実習の前後で変わったことはありますか。具体的に書いてください。

## 7. 基本情報について

性別 男性( ) 女性( )

年齢 20歳未満( ) 20歳代( ) 30歳代( ) 40歳代( ) 50歳代( )

